

黙示録11章3-13節 「全地に対する主の証し」

1A 二人の証人 3-6

1B 主の前のオリーブの木 3-4

2B 対峙する預言者 5-6

2A 獣による殺害 7-10

1B 大きな都に晒される死体 7-8

2B 諸国の民の喜び 9-10

3A よみがえり 11-13

本文

黙示録 11 章を開いてください。前回の学びは、11 章 1 節と 2 節でした。私たちに対する神のご計画に、神が私たちと共に住まわれるというものがあります。そこで神が、ご自分の神殿を建てるように命じられ、今は、御霊によって私たち自身が神殿となっています。しかし、イエス様が再び来られたら、地上に神殿を建てられて、その御座に着かれて、人々が礼拝を献げ、世界を統べ治められます。ところが、終わりの日には、その神の国における神殿ではなく、妥協した神殿、外の庭は異邦人に捨て置かれる神殿を建てるようになります。それが、ダニエル 9 章 27 節によれば、荒らす忌まわしい者が、ユダヤ人の多くの者と堅い契約を結び、それで建てられる神殿です。ところが、彼が三年半経ってから正体を表し、いけにえやささげ物をやめさせ、自分自身が聖所に入って、神であると宣言します。ユダヤ人にとっては、大きな患難であり、世界にとっても荒廃をもたらす者であります。

しかし、ユダヤ人自身も、また世界も政治的に問題が解決されたと思ってしまう。神の証しを立てているのではなく、妥協しており、偽りの神殿なのですが、世界はそれで対立がなくなるのだから万々歳なのです。キリストの十字架は世にとってつまずきですが、十字架抜きの平和は、世は大歓迎します。そこに、待ったをかけるのが、次に出てくる二人の証人です。世に対して、義を宣べ伝える預言者です。旧約時代に、イスラエルの預言者の第一人者が出てきますね。エリヤです。王がバアル信仰を始め、民がみなバアル信仰に偏っている時に、一人、待ったをかけた預言者です。このような働きが、世の終わりにあります。

1A 二人の証人 3-6

1B 主の前のオリーブの木 3-4

³ わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」

主が許されるのは、外の庭を異邦人に捨て置くことを許された、ということです。彼らがそのよう

な過ちを犯すままにさせた、ということです。その代わりに、主は二人の証人を立てます。「粗布をまとって」とあります。これは、嘆きや痛みを表す時、悔い改める時に身に着けるものです。人々に、罪を悲しみ、悔い改めるように呼びかけているのです。預言者ヨエルが、こう言いました。「2:12 「しかし、今でも——【主】のことば——心のすべてをもって、断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ。」

そして、「千二百六十日間、預言する」と言っています。これは一年を 360 日にすると、ちょうど三年半です。ダニエルの預言、第七十週の前半部分の三年半であります。最後の一週である、七年間が始まって、そこから三年半、反キリストが自分の正体を現すまでの間、信仰的に妥協して反キリストを受け入れているユダヤ人たちと、偽りの平和の中で溺れている世界の人々に対して、まっすぐに待ったをかける預言を語っているのです。

⁴ 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

ここは、ゼカリヤ書に出て来る幻です。預言者ゼカリヤは、エルサレム帰還後、神殿再建を行っていたユダヤ人たちに対して預言した預言者です。ユダヤ人がバビロンから戻ってきたのですが、神殿建築の働きは当時の異邦人たちによって阻まれました。しばらくその工事は滞っていたのですが、預言者ハガイとゼカリヤが来て、彼らを鼓舞し、神殿を建てる勧めを行ないました。そこでゼカリヤ書は、今まで異邦人に踏み荒らされてきたエルサレムが回復する預言となっています。当時のエルサレム再建だけでなく、終わりの日にイエス・キリストが再臨された後に回復するエルサレムのことも預言しています。

彼は合計八つの幻を見ましたが、五つ目の幻が、一つの燭台と、七つのともしび皿にそれぞれ付いている管と、その管が二本のオリーブの木につながっている、というものでした。ここは、ぜひ全部読んでみたいですね。

¹ 私と話していた御使いが戻って来て、私を呼び起こした。私は眠りから覚まされた人のようであった。² 彼は私に言った。「あなたは何を見ているのか。」私は答えた。「私が見ると、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があります。この上部にあるともしび皿には、それぞれ七本の管が付いています。³ また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はその鉢の右に、もう一本は左にあります。」

⁴ 私は、私と話していた御使いに言った。「主よ、これらは何ですか。」⁵ 私と話していた御使いが答えて言った。「あなたは、これらが何であるかを知らないのか。」私は言った。「主よ、知りません。」⁶ 彼は私にこう答えた。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の主は言われる。⁷ 大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼル

バベルの前で平らにされる。彼がかしら石を運び出せば、『恵みあれ。これに恵みあれ』と叫び声があがる。」

⁸ また、私に次のような主のことばがあった。⁹『ゼルバベルの手がこの宮の礎を据えた。彼の手がそれを完成させる。』そのときあなたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知る。¹⁰ だれが、その日を小さなこととして蔑むのか。人々はゼルバベルの手にある重り縄を見て喜ぶ。これら七つは、全地を歩き巡る主の目である。」

¹¹ 私は彼に尋ねた。「燭台の左右にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」¹² そして再び尋ねた。「二本の金の管によって金の油を注ぎ出す、このオリーブの二本の枝は何ですか。」¹³ すると彼は私にこう言った。「あなたは、これらが何であるかを知らないのか。」私は言った。「主よ、知りません。」¹⁴ 彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、二人の油注がれた者だ。」

ゼルバベルは、イスラエル人たちの総督でした。政治指導者でした。彼に、この神殿建築は大変かもしれない、いや、能力や権力によっては成し遂げられないが、わたしの霊によって成し遂げられる、という励ましのことばをゼルバベルに語りかけているのです。もう一人、宗教指導者に大祭司ヨシュアがいました。この二人が、燭台に油を注いでいる、油を注ぎだしている二本のオリーブの木だということです。この二人に聖霊が臨み、神殿の再建が神の恵みによって進んでいくことを示しています。

つまり、この、彼らの働きが原型となって、終わりの時にそれと同じ働きをする二人の証人が立てられるということであります。神殿再建について、まっすぐに神に対する悔い改めと清めを経験した彼らのように、霊的な復興なくして再建だけあっても意味がないことを示すことができる人々です。

2B 対峙する預言者 5-6

⁵ もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

二人の証言は、世界が望んでいる平和とは真っ向から反対のを行なっているので、人々は怒り、なんとかして滅ぼそうとします。世界は、平和を望んでいますが、キリスト抜き、霊的な清め抜きの偽物の平和を望んでいます。ですから、主に立ち返ることを説いている証人は、自分たちの罪が示されるので、妬み、憎しみます。それで、害を加えようとするのです。

しかし害を加えようとするれば、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くすとあります。害を加えようとするなら、それだけ自分自身を傷つけます。この預言は文字通り起こりますが、今の私たちにも

霊的には当てはまるでしょう。神の真理を語り、それにつまずき、齒向かうならば、傷つくのは反抗する本人なのです。パウロは、福音宣教者として、自分たちはキリストの香りを放っていると言っていますが、次のように続けて言っています。「Ⅱコリ 2:15-16 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。16 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいどれでしょうか。」救われる人々には、いのちに至らせる香りなのですが、滅びる人々にとっては死に至らせます。つまり、同じ福音なのですが、拒んでいく人たちはますます、自分が死に至ることを明らかにするような行為に走ります。

⁶ この二人は、預言をしている期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

この預言活動は、エリヤとモーセを髣髴とさせますね。そして、雨が降らないように天を閉じる権威については、エリヤがアハブ王のところに行き、雨が数年降らないと宣言をして、事実、三年半、雨が降らなかったことがあります(ヤコブ 5:17)。水を血に変える権威については、モーセが、ファラオの前で、ナイル川の水が血に変えたという災いがあります。

その他、エリヤは、イスラエル王アハズヤは死ぬという預言をして、それに怒ったアハズヤは、エリヤを捕まえようとしてやって来た五十人の隊長を、天からの火を下して焼き尽くしました(1列王 1章)。モーセの場合、モーセとアロンに齒向かったコラとコラに追従した 250 人がいました。コラは立っている地面が割れて、生きたまま地獄に落ちましたが、250 人は、主のところから出た火によって、焼き尽くしてしまいました(民数 16:35)。自分に危害を加えようとしているものを、災害で打つ権威が与えられていました。

そこで、ここの人物は実際にエリヤとモーセではないかと考える人が多いです。エリヤについては、旧約聖書の最後の書物、マラキ書の最後に、次の預言があります。「4:5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」終わりの時に、主が来られる前にエリヤが来ます。当時、バプテスマのヨハネがいました。彼は、「彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。(ルカ 1:17)」と言われた人物です。しかし、ヨハネ自身は自分がエリヤではないことを明言しています(ヨハネ 1:21)。イエス様は弟子たちに、ヨハネは、エリヤに働く御霊の力と同じ力でヨハネは来たのであるけれども、エリヤはまだ来ておらず、これから、将来に来ることを語っておられます。「マタ 17:11-12 エリヤが来て、すべてを立て直します。12 しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることになります。」11 節には、エリヤは来ると明言しています。12 節は、エリヤの霊と力で来たけれども、人々に認められなかった、好き勝手なことをしたと言われています。これは、ヘロデ・アンティパスが、ヨハネ

を斬首したことを意味しています。

では、もう一人の証人は、モーセであるかもしれない意見は、イエス様が高い山でエリヤとモーセに会って、エルサレムでの苦難を語られていたことがあったからです。「ルカ9:30-31 そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、31 栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」これから、黙示録11章の二人の証人は、殺されて、三日間半の後に起き上がり、天に引き上げられますが、それが、イエス様の最期と似ていますね。エリヤとモーセというコンビである可能性は十分にあると思います。エリヤは、預言者の代表的存在で、モーセは律法の代弁者でした。いわば、旧約時代の証人の代表です。ですからここで、旧約時代の証人が、この神殿が偽りであることを預言するのは自然なことです。

2A 獣による殺害 7-10

1B 大きな都に晒される死体 7-8

⁷ 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

二人の証言は、先ほど見ましたように、千二百六十日間、預言します。これは、ダニエルの預言の第七十週の前半部分の、三年半です。その証言が終わる、第七十週の半ばに、獣、反キリストは自分の正体を表します。詳しくは、13章にその様子が明らかにされています。「13:3-4 その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いてその獣に従い、4 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」死んだように見えたけれども、致命的な傷は治ったのです。そして、竜、すなわち悪魔の権威をもって人々の前に現れます。それが、ここ11章7節にある、「底知れぬ所から上って来る」ということです。9章で学びましたが、底知れぬ所とは、悪霊どもが最後の裁きのために閉じ込められているところです。獣、反キリストは、殺されたかに見えた時に、底知れぬ所に降り、そして再び出てきた、ということなのです。

そこで、獣は、二人の証人と戦って勝ち、殺しました。しかし、ここで大事なのは、「二人が証言を終えると」ということです。それは、使命が終わったのです。それまでは、どんなに害を受けようとも滅びることはありませんでした。けれども、使命が終われば死ぬことを主は許されたのです。私たちも同じです。私たちは、どんな苦難が来ようとそこから神は私たちを救い出してくださいませ。けれども、主が定められた時、その使命が終えたと判断されるなら、命が取られることもあるのです。

⁸ 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

ふたりの証人は埋葬されることなく、死体をさらされます。これは、非常に屈辱的なことです。そして、その場所は、エルサレムです。「彼らの主も十字架にかけられたのである」とあるからです。神殿がエルサレムにあるので、彼らの主な預言の活動場所もエルサレムだったのでしょう。

しかし、このエルサレムの都が、なんと「霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ」とあります。神殿建設において妥協をしていましたが、罪と不法の中に溺れていたのです。預言者イザヤが、このことを預言していました。神殿においては犠牲や供え物、また祭りも盛んに行われていたのに、彼らは罪と不法で一杯になっていたことを預言していました。そして、イスラエルに対してこう言っています。「聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民。私たちの神のみおしえに。(イザヤ 1:10)」私たちもいかに、形だけよくして、中身をおざなりにしてしまう過ちを避けなければいけないかが、分かります。

2B 諸国の民の喜び 9-10

⁹ もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて、その死体を墓に葬ることを許さない。¹⁰ 地に住む者たちは、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を交わす。この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである。

力強い御使いがヨハネに、「10:11 あなたはもう一度、多くの民族、国民、言語、王たちについて預言しなければならない。」と語っていましたね。ここで、このように世界中の人々が、死体を眺め、また喜び祝っている姿を見ます。世界中の人たちの敵です。二人の死体を眺めて、それで贈り物を交わすなどして喜んでいるのですが、相当、憎んでいました。まさに、主がニコデモに語っておられたことです。「ヨハ 3:19-20 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」

ところで興味深いのは、この死体をどのようにして世界中の人が見るのか？ということです。現代であれば、技術的に簡単です。エルサレムの嘆きの壁は、今インターネットで、世界中でライブ中継を見ることができます。また、マスコミが衛星中継して、死体を世界中のお茶の間に見せることは、今は可能です。当時、三日半の間、世界中の人が眺めるなど、できなかったはずですが。けれども使徒ヨハネは、忠実に啓示を書き記しました。今の私たちには、手に取るように分かります。

3A よみがえり 11-13

¹¹ しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。¹² 二人は、天から大きな声が「ここに上れ」と言うのを聞いた。そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

神は、敗北したかのように見える証人を、よみがえらせることによって勝利の証しとして最後、用いられます。三日、墓におられて、よみがえられ、そして天に昇られたイエス様を思い起こすような働きです。13章では獣がよみがえったように見えて、それで世界が彼をあがめるようになりますが、このようにして、まことの主に立ち返るべく、前もって証しを残されます。

¹³ そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。

都の十分の一が倒れ、七千人が死んで、ようやくエルサレムの住民が、天の神をあがめるようになります。小さな形ですが霊的復興が起こります。二人の証人が用いられています。彼らが語っていたことが、このような形で彼らがいなくなっても力を持っていることを知り、神をあがめています。「神はおられるのだ」という畏怖の念です。偶像ではなく、天の神に栄光を帰しました。

こうして、エルサレムで患難時代にも徐々に、霊的に覚醒していきます。神のしもべ 14 万 4 千人以外にも、イスラエル人やエルサレムの住民から主に立ち返る人々が起こされていきます。次回の 12 章では、このイスラエル人たちについての預言になります。

私たちは、二人の証人から、世に抗っても証しを立てることを学びました。主の権威が与えられていれば、どんな力にも敗北することがないことが分かりました。使命を果たせば、殺されることさえあります。けれども、その証しは必ず、残された人々にも力を与えます。自分がいなくなった後でも、自分の証言で主に立ち返る人さえ起こされるのです。